



＜学校教育目標＞ 自ら関わりをもち、自ら学びにチャレンジする子どもの育成
～友達大すき 学校大すき 地域大すき 嵐山の子～

令和4年度 全国学力・学習状況調査の結果より

4月に、全国の中学3年生・小学6年生を対象に実施された「全国学力・学習状況調査」についての結果が京都市教育委員会からの報告・考察も含めてまとまりました。本調査では、「国語」「算数」「理科」の3教科のテストと同時に、家庭での過ごし方や児童の学習に対する意識等を問う「生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査」も実施されました。その結果をもとに、本校6年生児童の学力と生活習慣の関係などの状況について分析し、まとめたものをお伝えさせていただきます。

総合結果（国語科・算数科・理科）

本校児童の結果を平均正答率の値で比較すると、京都府を国語科と算数科で5％、理科では7％、全国を国語科と算数科で約7％、理科では約8％上回っていました。正答数分布グラフでは、3教科とも標準的な山型が見られ、児童の学力の分布にあまり偏りがないと考えられます。また、三つの教科の内容についての分析では、評価の観点で京都府・全国の結果と比較すると、例年「知識・技能」の方が、「思考・判断・表現」より平均正答率において京都府・全国を上回る数値が高い傾向にあるのに対して、今年度は国語科の「思考・判断・表現」では京都府を5.4％、「知識・技能」では京都府を3.5％上回っており、「思考・判断・表現」の方が「知識・技能」より良い結果になっていると言えます。

また、問題形式においては、記述式の方が、選択式・短答式より平均正答率を上回る値が高くなっていました。これらの結果から、今年度の6年生は、低学年時から学習の中で思考を促す取り組みが、ノート作りの指導を伴いながら継続的に行われており、じっくり考えたり、記述したりすることに対して抵抗なく問題に臨めていると考えられます。これまでの3年間、本校では生活科・総合的な学習の時間を軸にした校内研究で、児童の問題解決に対する主体性を促す取り組みを進めてきた成果ではないかと考えています。

国語科について

国語科では特に、「思考・判断・表現」の内容の「書くこと」の力を見る問題で全国・京都府の平均の正答率を大きく上回りました。問題では、「6年生としてがんばりたいこと」を書いた筆者の立場になって、友達と伝え合ったことのよさを文章にまとめました。文章全体の構成に着目して文章を整えたり、伝え合った感想や意見を基に、自分の文章のよいところを書いてまとめたりすることができていました。一方で、この問題の正答率は全国・京都府を上回っていたものの、3割以上の児童の解答には課題がありました。引き続き、日々の学習の積み重ねの中で、目的に合った文章を書くことを丁寧に指導していきたいと思います。

また、「必要なことを質問し、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの内容を捉えることができるかどうか。」を問う問題、「言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることを捉える。」問題では京都府・全国の平均の正答率をやや下回っていました。本校児童の傾向として、話し合いの内容から必要なことを捉えたり、相手とのやり取りの中で相手の発言を正しく捉えたりすることに課題があると考えられます。

今後の学習指導に当たっては、話し合いの中で自分の主張を明確に伝えたり、相手の主張を正確に捉えたりするために必要なこと、具体的には「筋道の通った論の展開」「相手の主張に対する理解」を深めていけるような学習経験を増やしていきたいと考えます。



算数科について

算数科においても国語科と傾向が似ており、「思考・判断・表現」の問題での正答率が高い傾向にありました。特に、「分類整理されたデータを基に、目的に応じてデータの特徴を捉え考察できる。」問題では、京都府・全国の正答率を約15％上回りました。その他、比例を用いた問題、数の求め方や考察を記述する問題でも正答率が高い傾向にありました。記述する問題に対して、苦手意識を持たずに解答できており、国語科同様、算数科の授業でも、自分の考えだけでなく友達の考えについても、ノートを活用しながらきちんと記述している日頃の学習姿勢の成果がでているのだと考えられます。

課題には、「14と21の最小公倍数を求める。」という問題の正答率が低かったことが挙げられます。今後の学習指導では、より一層、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図ると共に、引き続き「考える力」の育成を目指した授業展開の充実を図っていききたいと思います。

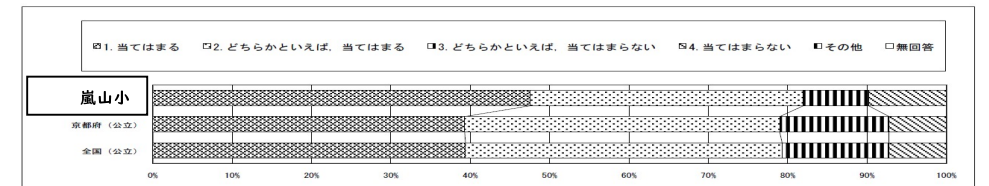
理科について

理科においても国語科・算数科と傾向が似ており、正答率が高い傾向にあるのは「思考・判断・表現」の問題でした。理科では、基本的な「知識・技能」を問う問題に対して確実に答えることができており、さらにその上に「思考・判断・表現」の力が生かしていることが、結果からよくわかりました。特に、「実験で得た結果を、問題の視点で分析して、解釈し、自分の考えをもち、その内容を記述できる。」かを問う問題では、記述式にもかかわらず正答率が京都府・全国より17％近く高く、粘り強く自分の考えを書く力がついていると言えます。

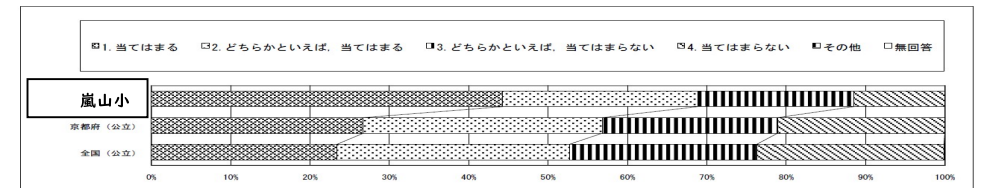
児童質問紙調査より

児童質問紙調査の中から嵐山小学校の傾向が顕著に表れていた項目を紹介します。

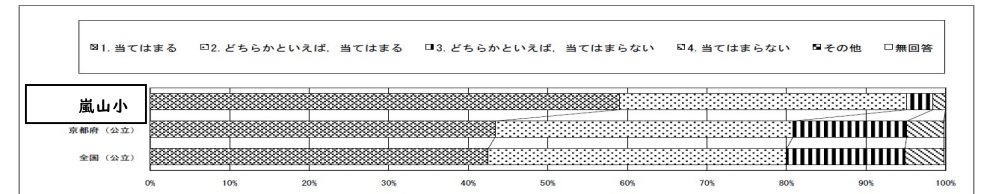
（7）
自分には、よいところがあると思いますか。



（29）
今住んでいる地域の行事に参加していますか。



（48）
道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいる。



上記の三つの質問に対して、当てはまると答えた児童の割合が特に多く、本校児童は「自己肯定感が高い」「地域との関りが深い」「道徳の学習を意欲的に取り組んでいる」ということが言えます。思春期の入り口にいる6年生が、自己肯定感を高く持てているのは、家庭・地域の皆さんが子どもたちを大切に思い、サポートしてくださっているからだと感じました。

おわりに

今回の調査結果に対する京都市教育委員会の分析からは、授業の中で子どもたちに「多様なテキストを的確に読み取る」「他者と協働し、関連付けて考える」「再構成した学びを表現する」力をつけ、習得した学習内容を生活に活用していく姿の大切さが言われていました。本校の授業づくりにおいても、児童が仲間と楽しみながら学習を進め、思考力・判断力を伴った知識や技能を獲得し、日常生活に生かしていけるような学習活動をすすめていきたいと考えています。

